

日本社会開発基金

成果報告

25周年記念版

脆弱なコミュニティの生活の質を向上

ホンジュラス：ラ・モスキティアの先住民族ミスキート族の生活の質向上

2020年-2024年 | 272万ドルのグラント

ホンジュラス北東部のカリブ海沿岸にあるラ・モスキティアでは、タワカ、ペチ、ガリフナ、ミスキートといった先住民族やアフリカ系民族のコミュニティが、伝統的な農業と漁業だけで人並みの生活を切り開こうと奮闘しています。豊かな文化遺産と広大な天然資源に恵まれているにもかかわらず、この地域の人口5万7,440人の大半は極度の貧困の中で暮らしており、インフラ、医療、教育、通信サービスへのアクセスが全くないか、限られています。

さらに悪いことに、気候変動による海面上昇、高温、洪水、激しい暴風雨は、コミュニティの農業活動を危険にさらし、人々が手頃な価格で栄養価の高い食料を手に入れることをさらに妨げる恐れがあります。

参加型設計、チームワーク、協調行動の原則にもとづき、[日本社会開発基金 \(JSDF\)](#) からのグラントによる資金提供と世界銀行の管理のもと、2020年に開始された「[ラ・モスキティアの先住民族ミスキート族の生活の質向上プロジェクト](#)」は、農業、漁業、畜産における社会経済活動を支援することでミスキート先住民族の生活の質を向上することを目的としています。272万ドルのグラントは、[アユダ・エン・アクション基金](#)によって実施されました。

プロジェクト活動は、食料安全保障を強化し、小規模経済を育成することで、対象コミュニティの生活の質を向上させることを目的としています。このアプローチは、食料生産のための農業、少数種の管理、職人による漁業、コミュニティ内の世帯によって生産された農産物と非農産物のマーケティングに焦点を当て、参加者が表明したニーズに合わせて調整されました。プロジェクトは当初から、現地や地域社会、地方の各当局やリーダー、女性、男性、若者と協力して、コミュニティが直面する課題に対する適切でタイムリーかつ効率的な解決策を考案しました。その後、生産活動を促進するためにコミュニティにマッチング・グラントを提供し、コミュニティのすべてのメンバー、特に意思決定から排除されることが多い女性が、生産者団体に指導的役割を担えるようにしました。コミュニティのメンバーが課題の特定と適切な解決策の立案に全面的に関与したため、伝統的な知識や先祖伝来の慣習が、しばしば国際的なベストプラクティスと組み合わせられ、プロジェクト支援の中核を成しました。

プロジェクトのチームリーダーであるノーマン・R・ハワード・テイラーは次のように述べています。「私たちは、ホンジュラスの最脆弱層に利益をもたらす活動を支援し、食料へのアクセスを多様化するために先祖伝来の慣行を構築しました。例えば、プエルト・レンピラでは、ヤフラビラの漁業コミュニティが、海洋資源の枯渇を防ぐために、いつ、どこで、どのように漁をするかという伝統的な知識と、持続可能な漁業技術を組み合わせています。」

プロジェクトは、2,010世帯に直接的な利益をもたらし、世帯メンバーの9,000人以上が間接的に利益を得ました。1,175以上の世帯が収入を20%増加させ、1,639世帯が生産コストを20%削減した一方で、このプロジェクトの受益者の72%が、プロジェクトによる支援の結果、経済活動の生産性が少なくとも20%向上したと報告しています。全受益世帯の64%は女性が世帯主であり、36%は男性が世帯主でした。その結果、コミュニティにおける女性の地位とともに、農業や行政、金融活動への女性の参加が著しく増加しました。農法も進化し、コミュニティは気候変動に対応した農業の原則を伝統的な農法に取り入れるようになり、より多くの女性が食料生産に参加するようになりました。これらの変化は、栄養状態の改善、効率性の向上、気候関連の災害に対する回復力の強化につながり、長期的には、より持続可能で適応性のあるコミュニティ形成に役立ちます。

このプロジェクトの成功の鍵は、政府、市民社会、国際機関のあらゆるレベルが共通の目標に向けて協力し、この協力を具体的で変革的な変化につなげたことにあります。

